AOA会員訪問団2024（東京）参加報告

日本共済協会　調査研究部長　亀井（かめい）　隆（たかし）

1. はじめに

AOA（ICMIFアジア・オセアニア協会）会員訪問団2024による視察が、5月22日～23日の日程で東京・千葉で開催され、フィリピン、スリランカ、韓国、ニュージーランド、日本の5カ国から11団体26名が参加しました。日本の3団体、JA共済連、こくみん共済 coop およびコープ共済連がホスト団体となり、日本共済協会が協力団体として、訪問団を受け入れました。

今回の会員訪問団は、日本の共済事業の現状や、農業者、労働者、消費者と異なった組合員・契約者を対象とした共済団体のそれぞれの組織の特長や取り組み等について、参加者に理解を深めてもらうことを目的に開催されました。本稿では、2日間にわたって開催された訪問団の視察について、その主な内容を報告します。

AOA（ICMIFアジア・オセアニア協会）

ICMIF（国際協同組合保険連合）の地域協会のひとつとして1984年に設立され、アジア・オセアニア地域の10カ国44団体が加入している（2024年4月現在）。

アジア・オセアニア地域の協同組合保険運動の発展支援や会員相互の交流機会の増大および友好の促進を目的に、セミナー等を定期的に実施している。

2. 視察1日目（5月22日）

(1) 開会挨拶

会員訪問団の開会はJA共済幕張研修センターで行われました。JA共済幕張研修センターは、JA共済事業に関わる人材育成を目的とし、「ひと・いえ・くるま」の保障にかかる専門的な知識を効果的に学ぶことができる教室や展示場を備えた施設です。初日は、この施設を利用してJA共済連の自然災害や農業事故に関する取り組みを、講義と併せて視察および経験を交えて学ぶプログラムが組まれました。

AOA会長（JA共済連代表理事理事長）
柳井（やない）　二三夫（ふみお）　氏

ロビーに集合した参加者は、視察に先立ち行われた記念撮影でお互いに言葉を交わし合うなど、初対面ながら打ち解けた雰囲気に包まれ、今回の視察を心待ちにしていた様子がうかがわれました。

会場となる教室に移動した後、まずAOA会長柳井二三夫（やないふみお）氏（JA共済連代表理事理事長）から開会の挨拶がありました。今回の訪問団が、AOAセミナーやICMIFカンファレンス等で紹介された会員団体の取り組みについて、直接見聞きし、感じてもらう有意義な場であり、かつ各国の仲間が一同に会して理解しあう絶好の機会であることから、学びとコミュニケーションを深める実りの多い視察としてほしいとの期待が込められた開会挨拶でした。

日本共済協会 調査研究部次長 中隈（なかぐま） 利彦（としひこ） 氏

JA共済連 代表理事専務 歸山（きやま） 好尚（よしなお） 氏

⑵ 日本の共済事業について

最初のプログラムでは、日本共済協会調査研究部次長の中隈利彦（なかぐまとしひこ）氏から「日本の共済事業について」と題して説明がありました。

日本では共済事業を規制する法律と監督官庁は団体により異なること、生命分野と損害分野の兼業が認められていることなど日本の共済事業の特徴について説明がありました。また、少子高齢化とそれに伴う人口減少、今年1月に発生した能登半島地震をはじめとした頻発する巨大自然災害の影響や低金利下の厳しい運用環境等、日本の共済事業を取り巻く諸課題について具体的な数字を用いた解説がありました。さらに、新型コロナウイルス感染症により日本共済協会の会員団体が支払った共済金が2020年4月からの3年間で4,000億円を超えたことを示し、共済が多くの組合員の生活を支えたと述べました。

参加者からは、研修会の開催状況や調査研究の内容等、日本共済協会の事業活動について多くの質問が寄せられ、海外では珍しい共済団体間の連携促進という役割を担う協会への高い関心がうかがわれました。

⑶ JA共済連におけるプログラム

① 自然災害への取り組み

続いてのプログラムでは、JA共済連代表理事専務の歸山好尚（きやまよしなお）氏から「JA共済連の事業戦略と具体的な取り組み～自然災害対応の重要性～」について説明がありました。

JA共済連の成り立ち・使命、事業戦略に触れたのち、歸山氏からは、これまでの自然災害、特に巨大地震災害発生時のJA共済連の対応について解説がありました。今年1月に発生した能登半島地震において、衛星・航空写真と地図情報とを照合し、火災による消失エリアや津波エリアを特定し、迅速な損害査定につなげた事例が紹介されました。また、同じくデジタル活用の一環として、グーグルマップ上に契約者の契約情報を世帯単位で表示するとともに、損害査定・共済金支払状況が色の違いにより一目で確認できるツールが紹介されました。これにより支払いまでの進捗状況の把握を容易に行うことができ、損害査定業務の効率化に大きな役割を果たしたとのことでした。

最後に歸山氏からは、今後、南海トラフ地震の発生が想定される状況下にあって、災害に強いJA共済を目指し、「安心・満足の提供」という使命を全うしていきたいとの決意表明がありました。

巨大自然災害への備えが世界共通の大きな関心事になっていることから、参加者からはデジタル活用や南海トラフ地震の被害想定のデータ取得方法等について多くの質問があり、活発な質疑応答となりました。

② 地域と農業に関する取り組み

昼食をはさんで、JA共済連常務理事の近藤修一氏から「JA共済連の具体的な取り組み～地域と農業への貢献～」と題して説明がありました。

JA共済連 常務理事 近藤 修一 氏

保障提供はもちろん、元気な体づくりをサポートするプロジェクトである「げんきなカラダプロジェクト」や、歌や踊りを通じて幼児に交通ルールを伝える「JA共済アンパンマン交通安全キャラバン」等の、さまざまな病気や事故等の未然防止活動についても解説がありました。

また、JA共済連の農作業事故未然防止への取り組みについても紹介がありました。農業就業者の10万人当たりの就業中死亡者数が、全産業平均と比べて約9倍も高い実態を示しつつ、農作業事故を疑似体験することができる「農作業事故体験VR（バーチャル・リアリティー）」や、WEBサイトを活用して農作業中のケガや農作業用自動車の事故等、農作業時に発生するリスクを診断する「農業リスク診断」などの取り組みを紹介しました。

近藤氏は、「助け合いやパートナーシップを通じて農業や地域社会と広く深くつながっていくことを実践していきたい。健やかな暮らし、皆さんの安全、農業がもたらす豊かさを未来につなげていきたい。」と、今後の活動に向け力強く抱負を述べました。

③ 体験プログラム

その後のプログラムでは、JA共済連が開発したリスク予防のためのツールを参加者が実際に体験する機会が設けられました。

「農作業事故体験VR」は農作業事故の未然防止を目的に、農作業中の事故を疑似体験できる国内初の農作業事故体験VRで、JA共済連が農研機構と共同開発したものです。参加者はVRゴーグルを装着し、刈払機の刃との接触事故等を疑似体験しましたが、あまりのリアリティに驚きの声が上がっていました。

「地震ザブトン」を体験する参加者

「ザブトン教授の防災教室」のコーナーでは、イス型の地震動体験装置「地震ザブトン」の体験会がありました。「ザブトン教授の防災教室」は過去に発生した地震の揺れを体験し、家具固定など日頃から地震に備えることの必要性を再認識してもらうための体験学習型プログラムです。参加者はイス（地震ザブトン）に座り、阪神・淡路大震災や東日本大震災を忠実に再現した揺れを体験しました。参加者からは「大きな揺れの前では恐怖で何もできなくなってしまう。だからこそ家具の固定等事前の備えが大切だということが身をもって実感できた」という感想が聞かれました。

また、同研修センターで研修に使用されるさまざまな展示品の見学も行われました。

JA共済における地震の損害調査の方法についての説明を受けた後、研修センター内に設置されている実物大の洋式家屋および和式家屋の見学を行いました。屋根や壁が一部取り払われており、この展示物で家屋の構造を学ぶことができるとともに、火災や地震による被害も再現されており、この家屋を利用して損害額の査定

JA共済幕張研修センターの施設見学

方法等についても習得することができます。

さらに、自動車展示室では実物の自動車を切断したカットモデルや、事故により損傷した自動車の展示を見学しました。参加者は初めて見る展示品を興味深く見学していました。

3. 視察2日目（5月23日）

⑴ こくみん共済 coop におけるプログラム

2日目の視察は、こくみん共済 coop 会館で始まりました。まず冒頭にこくみん共済 coop 代表理事専務理事の髙橋忠雄氏から、参加者に対して「心から皆さんの訪問を歓迎したい。今回の訪問で、こくみん共済 coop のことや、その挑戦の歴史について理解を深めていただければと考えている。今回の視察が皆さんにとって有意義な時間となるようがんばっていきたい」と、開会の挨拶がありました。普段はフリーアドレス用のワーキングスペースとしても利用されている会場は、緑も多く配置され、開放感があり、参加者はゆったりした気分で挨拶に耳を傾けていました。

続いて昨年9月にオーストラリア・シドニーで開催されたAOAセミナーのヤングリーダーズプログラムに参加した柏原未貴（かしはら みき）氏、石原史貴（いしはらふみたか）氏、水野恵理氏の3名からこくみん共済 coop の組織概要、事業活動等についての説明が行われました。また、こくみん共済 coop が取り組む社会活動についても説明があり、活動の柱としている「防災減災の取り組み」「子どもの健全育成の取り組み」「環境保全の取り組み」の3つについて詳しい解説がありました。

その後、ふたたび髙橋氏から「今こそ『共助』の役割発揮を」と題して講演がありました。こくみん共済 coop における自然災害への対応の歴史を5つの挑戦に分け、その時々の社会課題に対して共済事業や運動を通じて安心を提供してきたこくみん共済 coop の70年の歴史を振り返る講演でした。なかでも、第2の挑戦として新潟労済で共済事業を立ち上げた翌年に発生した新潟大火（1955年）において、給付金財源が乏しい状況下にあって、「借金はいつか返せるが、失った信頼は永久に取り戻せない」という信念のもと、労働組合等からの支援を受けながら共済金の全額支払いを完遂し、このことが各地での共済事業の開始につながったこと、第3の挑戦として阪神・淡路大震災後、自然災害に対する公的な保障制度の実現を目指した運動を展開し、これが1998年の被災者生活再建支援法の制定につながったという説明が特に印象に残りました。

こくみん共済 coop の会場の様子

こくみん共済 coop 代表理事専務理事
髙橋 忠雄 氏

髙橋氏は、最後に保険の「自助」とは異なる共済の「共助」という考え方を大切に、今後も共済をつうじて組合員とその家族に安心を提供する取り組みを進めていきたいと決意を述べました。

⑵ コープ共済連におけるプログラム

午後は、東京大学駒場キャンパスに移動し、大学生協やコープ共済連の活動内容について説明を受けました。

まず、東京大学生協代表理事理事長の石田淳氏から歓迎の挨拶とともに、東京大学の概要や学生生活等について説明がありました。

学生食堂での昼食をはさみ、コープ共済連の総合マネジメント本部 渉外・広報部長 淺田佳則氏から、組合員の声をもとに商品改定を重ねてきたCO･OP共済の歴史が紹介されました。冒頭淺田氏からは、生協の事業概況の説明がありました。日本の全世帯の約39％、2,300万人が生協の組合員となっており、宅配やスーパーマーケットなどを営むなど地域生協は組合員にとても身近な存在になっていること、大学生協は150万人を超える学生が組合員として加入しており、学生生活のさまざまな場面を支えていることなど、生協の活動について具体的な数値を用いて説明しました。また、CO･OP共済の歴史について、1984年、手ごろな掛金で主婦や子どもを中心に入院・ケガに対する保障の提供からCO･OP共済が始まり、現在では4つの商品を主なラインナップとして970万人を越える人々に加入されるまで大きく成長していること等の説明がありました。最後に淺田氏は、「これからも組合員の声に真摯に耳を傾け、組合員の暮らしをサポートしていきたい」と抱負を述べ、説明を終えました。

淺田氏の説明の後、全国大学生協連 理事の中野駿氏から、全国の大学生協の概況と学生総合共済に関する取り組みについて説明がありました。

全国大学生協連 理事 中野 駿 氏

中野氏は全国の大学生協の共済共通の取り組みとして、「加入・給付・報告・予防」の4本柱を大切に運営し、組合員の健康で安全な暮らしと学業継続を守っていることを述べました。東京大学生協学生委員長の森田匠氏は、東京大学生協における4本柱の活動の事例として直近の給付状況、最近発生しているケガや病気に対

東京大学生協 学生委員長 森田 匠 氏

する注意喚起のためのボードの取り組みを紹介し、東大生協の学生委員会では特に予防に重点を置いて活動していると説明しました。時折、英語によるジョークを交えての解説に、参加者はリラックスしながら耳を傾けていました。

コープ共済連 代表理事理事長 和田（わだ） 寿昭（としあき） 氏

最後に、コープ共済連代表理事理事長の和田（わだ）寿昭（としあき）氏から、日本はもとより世界的にも共済・保険が担う予防の役割は大きくなっており、コープ共済連としても予防の観点から可能なことをしっかり検討していきたいとの決意が語られるとともに、「ひとりでは備えることが難しい困難に対してみんなの力で立ち向かうことを制度化したものが共済であり、それぞれの国でリスクに対する考え方は違っていても共済の理念は共通している。この2日間の視察の内容が皆さんの国の共済・保険事業に少しでも役立てば大変うれしい」と、この2日間の視察を総括する閉会の挨拶がありました。

4. おわりに

視察終了後、多くの参加者からAOAやホスト団体に対する感謝の気持ちや、この視察で学んださまざまな知見について帰国後に同僚と共有したいとの感想が聞かれました。

各団体の取り組みはそれぞれ特徴があるものの、根底を流れる助け合いの精神を形にした共済への想い、また災害予防への取り組みに対する熱意は参加者にも共通するマインドとして印象に残ったものと思います。今回の視察で共済団体の国際的な交流の輪が広がるとともに、各国の共済・保険事業の発展に向け、参加者の皆さまがより一層活躍されることを期待しています。

※　文中の肩書は当時のものです。

懇親会場で参加者を出迎えるキャラクターと記念撮影
（左から「ひとのわグマ」（JA共済）、「ピットくん」（こくみん共済 coop）、「コーすけ」（CO･OP共済））